山なみさして雲かえる
――文学部を退職するにあたって――

井手誠之輔

文学部には長らくお世話になりました。六本松の旧教養部から箱崎に移り、美学・美術史研究室の平田寛・菊竹淳一両先生の薫陶を受け、専門課程と大学院を過ごした学生時代、両先生の元で研究室の運営を補佐した助手時代、東京国立文化財研究所から教授として出身講座に迎えられて退職までの教員時代。立場や役割は異なりますが、三十一年もの間、共に学び共に生きる意味を深めその責任を果たす場として寄り添っていた文学部に厚く御礼申し上げます。

学生時代には、高野悦子『二十歳の原点』の巻頭言を「未熟であること、（孤独ではなく）個であること、それが私の原点である」と読み直し、自分なりの原点とすることで救われる想いがありました。駆け出し研究者の頃には、筑後の詩人で絵描きでもあった平井光典氏の額字「自分で光らねばしょうがない、沼はそう思っている」の意味をかみしめ、啓発と研鑽の日々を送ってきました。

母校への着任は二〇〇四年の新学期の直前でした。国立大学が独立行政法人となった年にあたります。研究院と学府・学部とが別組織となる制度がすでに導入され、とりわけ研究室に助手が居ることが日常ではない日常に戸惑いましたが、研究と教育との併行・両立に精励する日々を続けることができたのは、改革が大学の本来的な使命を変えることはないとする恩師の言葉に励まされたからです。この間、歩く哲学者然とした昔年の教授陣や恩師二人の背筋を伸ばしたダンディなたたずまいにはほど遠く、父母から授かった健朗さに身を委ねるだけで、背伸びすることなく同僚の教員諸氏をはじめ学生や事務の方々とも接し、それを許容

していただいて安住してきました。等身大の領分に徹することを尊重する文学部の懐の深さを思うと、大学人として恥ずかしくもあり、またありがたくもある不思議な心持ちです。

九大では、海域交流の窓口となってきた場の意味を考え、国の周縁にありながら地域の中心として、また東アジア世界からグローバルな世界に開かれた拠点として機能すべく自他共に努力することを信条としてきました。その実践として学生にも準備段階からの経験を重視し、専門性に徹した国際シンポジウムや研究会を九大や福岡地域で主催する日々を続けてきたように思います。幸運にも二〇〇五年度から特定領域研究による寧波プロジェクト（通称にんぷろ）を遂行するための一翼を担わせていただき、その後も基盤研究や大学からの助成金をとおして、就任講義で公約した大徳寺伝来五百羅漢図の研究を進め、二〇一八年六月には移転を直前に控えた箱崎地区で国際シンポジウムを二日間にわたって開催し、国内外から多くの方々に参加していただくことができました。半島由来の仏教文物に関する共同研究は、今も継続しています。宋元仏画の研究であれ、高麗仏画や朝鮮前期仏画の研究であれ、私の研究は、造形をめぐる心の動きを等身大の社会に照応させながら目前の作品について語ることの大切さを平田先生から学びとり、菊竹先生が種を蒔かれて育成された新たな福田を、東アジア世界の広がりと関係性の中で私なりに開拓していく作業でもあったと実感しています。

文学部での思い出は尽きません。箱崎での文学部棟の改修に際して一時的に仮校舎となった旧法文学部棟で過ごし、半年後には改修後の校舎へ戻り、恩師の両先生と図って廊下や階段の踊り場の白壁を飾るために美術品の贈呈を募って実現したことが懐かしく想起されます。そして伊都地区の新キャンバスへの移転とコロナ禍の日々。三度の引越しは、文学部のホコリ高き

文化的資本には計測不能な厚みや重さがあることを、身をもって知らされる機会となりました。イーストゾーンの一号館と二号館の壁面を飾る絵画は、箱崎から移設したものです。コロナ禍の二年目には、前年に中止した研修旅行を断行。三密回避を徹底し、大学のマイクロバス二台を錦秋の瀬戸内に走らせて美術館や寺院をめぐり、西明石では運転手の方々に休憩していただき、その間大阪から奈良・京都までを電車で日帰りするという大それた旅でした。「狂わぬものは友とすべからず。」平田先生から教わった明恵上人の言葉に背中を押されているようで、破顔一笑、痛快でした。

研究と教育は不二で、指導する学生たちの研究からも多くの学びを還元させて貰いました。中国・韓国・台湾からの留学生をはじめ、毎週の金曜会で古今東西にわたる対象について研鑽を共にした学生が、それぞれの身を置く場で切磋琢磨してくれていることは、研究室の教員がひとしく誇りとするところです。

山なみさして雲かえる。この表題は高校の校歌から拝借しています。社会学者の高田保馬が故郷の旧制中学時代を回想し、楠の青葉を吹き鳴らす朝の風に対し、夕べの光景を詠んだものです。今後、おなじ故郷に仕事場を移しますが、帰去来であれ、禅の方法帰一であれ、見知らぬ老境を、睨みつけることなく愉快に迎えいれる覚悟です。「愚」かで「老」いゆく身であることを忘れずに「軽」やかさに徹し、市井の片隅で、皆さんと共にしてきた広がりのある世界に身を委ね、山なみの向こうから立ちあがる空の無尽の果てへと近づいていきたい。そんな心境であちらこちらに居候することを期しています。

末筆ながら、長い間にわたるご厚誼に改めて深く感謝申し上げます。

（いで　せいのすけ　美学・美術史教授）